



ドルトムント独日協会

Deutsch-Japanische Gesellschaft Dortmund



福島で開催される野球・ソフトボールオリンピック競技にレッドカードを！

ドイツオリンピックスポーツ連盟
ヘルマン会長様

私たちは2020年に予定されている東京オリンピック、特に福島市で予定されている野球とソフトボール競技にレッドカードを突き付けます。競技者と観戦者がその折被ばくする危険性があるからです。福島でどうしても競技をしなければならない理由は全くありません。

東京オリンピック開催は日本政府が単に政治的な判断から決定したものであり、福島市の現状をまったく配慮していません。さらに東京オリンピック開催の決定以来、建築労働者の多くが東京に投入され、福島市の除染の仕事にも支障をきたしています。

安倍首相は、“すべてアンダーコントロール”政策を推し進め、この7月8日に開かれる福島県「県民健康調査」検討委員会で「甲状腺がんと放射線被ばくの間の関係は認められない」ことを公式見解として決定し、さらに「甲状腺検査のデメリットを強調した「お知らせ」を検査該当者に送る」ことをもくろんでいます。

2018年1月23日に民の声新聞に掲載されたフリージャーナリスト鈴木博喜氏のレポート、伊達市の住民の切実な声を紹介します。

伊達市内で3人の子どもの子育て中の40代母親。

放射性物質で内部被曝した影響が将来どのような形で出て来るのか、とても心配です。娘は、福島ということで結婚出来ないかもしれない。上の息子は、野球のクラブチームに所属している。好きな野球に取り組んでいる彼はとても生き生きと輝いている。そんな息子をサポートしている自分も、とても楽しく充実した日々を送っている。しかし…プレーで舞い上がった砂ぼこりを吸い込む事で内部被曝しないだろうか不安になる。泥だらけのユニフォームを洗濯するたびに、付着した土の中に、どれだけの放射性物質が含まれているのかと考えてしまう。心配なのは土壌です。土壌に含まれる“セシウムボール”が再浮遊し、吸い込む恐れがあると聞きました。ぜひ土壌の測定をして欲しいです。学校だけでなく、スポーツが行われる専用グラウンドも含めた詳細な土壌測定を望むのは、親としては当然の願いだ。しかし、伊達市長は原発事故後、被曝によるわが子への健康被害を不安視する親を“心の除染が必要”などと見下すような発言を続けてきた。少しでも被曝リスクを減らそうと、子どもには風邪を引いていなくてもマスクをさせている。屋内で過ごさせる事も増えた。福島県外の食材を取り寄せているが、県境に壁があるわけではない。何をどうすれば“安全”なのか。様々な想いが頭をよぎる。

2019年7月9日

ドルトムント独日協会
会長
シュルターマン容子